

今日本でもコロナウィルス感染者がまた増えています。罹患した人に対する偏見や差別、罪人視等水面下であることでしょう。いつ自分がかかるかわからない不安に脅かされて、本来の人間関係を保つのに困難を示していることがあります。勿論コロナ禍に対する感覚は、個人差がかなりあることでしょう。しかしそれでも、私どもはこの状況下において、キリストの愛と憐れみを願いつつ、社会に対してもそれらを証していけるようになりたいものです。

今日の聖書箇所は旧約新約とも重い皮膚病の人の話です。皮膚というのは自分自身と外界との境界に当たります。周囲の様子を無意識に感じ取るのも、この皮膚かもしれません。重い皮膚病というのはかつてらい病と訳されていました。病気の名前など、また医学用語はギリシヤ語やラテン語に由来するものが多く、そのまま使われることも少なくありません。この病気も英語やフランス語などでは、元のギリシヤ語が使われています。ところがドイツ語の聖書ではそうではないのです。確かに一般にはギリシヤ語からの言葉もあり、使われますが、聖書でのこの言葉は「(共同体の)外に置かれている」という本来のドイツ語なのです。新しく出た協会訳の聖書では「規定の皮膚病」となっていますが、いずれにしてもレビ記13章にあるように、この病気にかかったものは、共同体から隔離されていたということなのです。旧約のアラムの軍司令官のナアマンはこの病気にかかっていたにもかかわらず、隔離されていなかったことが分かりますから、それは「重い」ではなく「軽い」皮膚病だったのかもしれません。コロナにおいても罹患すれば一応隔離されるわけですが、それは本人にとっては精神的苦痛であることでしょう。またこの重い皮膚病に罹った人には触れてもいけないのです。女性などでは人から触れられるのが嫌な方もおられるでしょうが、逆に触れてもらえないというのは実に淋しいものではないでしょうか。タッチしてはいけない、アンタッチャブルな人を深く憐れみ、手を伸ばして触れられたのです。触れて頂いたその男はいかに嬉しかったことでしょう。今のコロナ禍においても接触は避けられていますが、これはもう少し微妙です。つまり触れて感染するのを避けるという思いと、また逆に自分が移す可能性があるのを避けるという思いです。イエス様は手を触れてその男を癒されました。一方ナアマンを癒した預言者エリシヤは、手を触れず、また面と向かって合わず使者を遣わして、ヨルダン川で洗いなさいと言っただけでした。イエス様は神の子として全能の父の権威と権能が授けられていたのですが、エリシヤは預言者ですので、彼は神の力を伝えただけでよかったのです。癒されたのは主なる神だったのです。イエス様に癒しを乞うた男は、「御心ならば」と膝間づいて懇願しました。その信仰を見てイエス様は「よろしい」と言われますが、これは「わたしは意志する」というのが直訳であり、その懇願した男の「御心ならば」に対応しているようにも思えます。イエス様をそのように動かした心の動機は、「深く憐れんだ」という感情だったことでしょう。しかし面白いことにここで「深く憐れみ」という言葉は別の写しでは「怒って」ともなっているのです。どちらが本当であったかわかりませんが、両方の感情があったのかもしれませんが。では「深く憐れむ」のは納得いくのですが、他方イエス様は何に「怒った」のでしょうか。それは思い皮膚病の元凶となっていると考えられた悪霊に対してだったことかもしれません。皮膚病が去り清くなった後に、イエス様は「立ち去らせようとし」と有りますが、これは悪霊を追い出す時にも使う言葉です。このように癒された男に対してイエス様は、祭司に見せさげものをするようにと言われます。これはイエス様が決して律法を軽んじていたわけではなかったということです。律法の規定はきちんと守るように、ということをおっしゃいました。

この辺でまた旧約の方に目を向けましょう。アラム(イスラエルの北、シリアの辺り)の軍司令官ナアマンの身に起こったことです。そのころアラムをイスラエルは戦争をしたらしくその闘いはアラムに軍配が上がりました。ナアマンが軍司令官であり大きな役目をしたのですが、その働きは主によるものでした。主はナアマンを選び、彼を通して、アラムに勝利、イスラエルに敗北をもたらせたのです。この種なる神の御計らいには驚くほかはありません。ナアマンはアラムの王にも信頼されており、万事が順風満帆のようでしたが、ただ彼は重い皮膚

病を患っていたのです。先ほども言いましたが不幸中の幸いで、共同体からは隔離されていなかったようなのでそれほど重い病ではなかったようです。とはいえそれはやはりかなり深刻であったことでしょう。そのような折に一つの導きが彼に与えられたのです。戦いに勝って征服したイスラエルから一人の少女を捕虜として妻の召使にしたのですが、彼女が自分の母国にその病気を癒すことができる預言者がいるということを奥さんに伝えるのです。彼女にとってみればアラムのナアマンは自分の国を制圧した立役者であるのですから、このナアマンに対しては憎しみがあつたと思うのですが、むしろ彼女はナアマンを深く憐れんだのではないのでしょうか。つまり確かにアラムはナアマンの働きによってイスラエルに勝ったけれども、それは国同士の関係であり、たとえ捕虜としてナアマンとその妻の召使になつたとしても、そこで寵愛されていれば、自ずから女主人に対しても、ナアマンに対しても良い感情を持つことでしょう。このイスラエルの娘はナアマンをかわいそうだと思ったのです。そしてアラムによってイスラエルを制圧させたヤハウエの神をそれでも信じていてさらにその力も信じていました。そこでその主の癒しを伝えたのです。これは異国における一人の少女の宣教ともいえるのではないのでしょうか。またそれだけでなくその少女の言葉を軽んぜずに受け止めたナアマンの信仰があつたのです。ナアマンは戦勝国の偉い人であるにもかかわらず、捕虜の少女の言葉を受け入れたのです。その後でもナアマンはエリシャの所に行きますが、会ってももらえず伝言だけでした。負けた国の預言者のこの態度に対しても、彼は頭にきたかも知れません。それでもナアマンは言われたとおりに川に行つて身を洗つたのです。この後癒されたナアマンにはまた一つの試練があります。それはアラムの軍司令官としてアラムの王と国に仕えなければならないのですが、そこは異教のリモンの神殿に礼拝をささげる国でしたので彼も立場上礼拝に加わらなければならなかったのです。しかしまたナアマンはイスラエルの神ヤハウエに忠誠を誓います。ヤハウエの神は一神教ですから、ナアマンも板挟みジレンマに陥つたことでしょう。このような状態は日本のキリスト信者にも降りかかってくる問題であることが多いのではないのでしょうか。そのような時に、イエスさまこそ異邦人の救い主であることを再確認して、信仰を守っていききたいものです。

イエス様によって清くされたものは、隔離を解かれて町の中に入ります。またナアマンも以前のような対人関係における苦しみからは解かれたことでしょう。私は前任地が大阪でしたが、かつて神谷美恵子さんの本を読んで一度瀬戸内の島にある頼病の療養所に行つてみたいと思つていました。幸い近隣の牧師がその関係を持つておられたので、機会があつたので同行させていただくことにしていました。ただ私が知つたのは、確かに今日ではこの病は不治ではなく感染力も弱いということで、そこの入所者は自宅に帰つてよいということでしたが、しかし故郷では家族は断絶しており、また長年そこにはいなかったことや過去への偏見から帰郷ができないということでした。そして彼らはやはりその島で余生を過ごすしかないということでした。しかしその療養所はもはや入所する者はいなく、今いる人たちがいなくなれば無人化、消滅することになります。彼らが一番不安で悲しくなつてゐるのは、その療養所がなくなり自分たちが生きてゐたという証しがなくなることであり、風化してしまうことなのです。この世に生を受けたものが子孫を残すことなく、社会からも忘れ去られていく。自分が生きてゐる意味がなくなるのが恐ろしく空しく悲しいのです。

イエス様に癒された男は町に入ることができました。共同体の一員となることができそこで語り活動をするようになったのです。癒されるというのは勿論体が清くなることもありますが、それだけでは十分ではないのです。精神的にも癒されなければならない。それにはやはり共同体に加えられ豊かな愛と信頼のある人間関係が築かれることです。

結局私はその後お誘ひ頂いたけれども行くことはありませんでした。一つには自分の内にその訪問が、興味本位で自分の知見や経験を豊かにするためのような動機であつたことが、なんだか失礼な感じがしたからです。神谷美恵子さんのように後半生をかけて共に生きるという意思をもって接しなければ、真摯な交わりにはならないのではないかと思つていました。それでも自分のできる範囲で交わり援助するのも悪くはないのではと今は思うようになりました。イエス・キリストの深い憐れみによる癒しが、不本意な人生を送ることを余儀なくされた方々の上にあるように祈ります。またわたしどもの上にも。